本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2023 山本浩貴

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

現代アートと空気
可視化と価値化

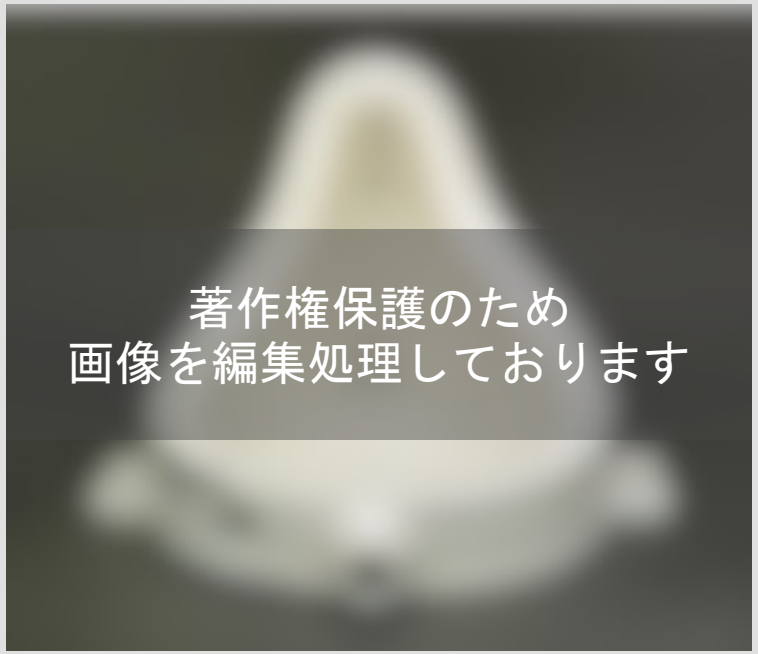
山本浩貴
（金沢美術工芸大学）

現代アートとは何か

- 20世紀以降の美術（「現代美術」の広い定義）
- 第2次世界大戦以降の美術（「現代美術」の狭い定義）
- 1990年代以降の美術（「コンテンポラリー・アート」）

山本浩貴『現代美術史——欧米、日本、トランスナショナル』
（中公新書、2019）
北澤憲昭『眼の神殿——「美術」受容史ノート』
（ちくま学芸文庫、2020）

マルセル・デュシャン
《泉》
（1917）



Marcel Duchamp, *Fountain*, 1917, replica 1964

© Succession Marcel Duchamp/ADAGP, Paris and DACS, London 2020

https://www.tate.org.uk/art/artworks/duchamp-fountain-t07573

現代アートの特徴

① 自己言及性

「アートの境界線はどこにあるのか。何でもアートになりうるのであれば、アートをそれ以外の一切から区別するのは何か。」
（ダントー、36頁。）

② 反形式主義 → 「コンセプチュアル・アート」（1960s米～）

「デュシャンの貢献は、アート作品から美学を引き算したこと」
（ダントー、38頁。）

アーサー・C・ダントー『アートとは何か――芸術の存在論と目的論』（佐藤一進訳）、人文書院、2018年。

クレメント・グリーンバーグ
「モダニズムの絵画」
（1978）

- 提示され明らかにされねばならないことは、芸術一般においてのみならず各々の個別な芸術において、何が独自のものであり削減し得ないものか、であった。各々の芸術は、それ自身に特有の営為を通じて、それ自身に特有であり独占的である効果を限定しなければならなかった。こうすることによって、各々の芸術は、その権能の及ぶ領域を狭めることになったのは確かだろうが、しかし同時にかえっていっそう安泰にこの領域を所有することになったのであろう。

- 各々の芸術の権能にとって独自のまた固有の領域は、その芸術のミディアムの本性に独自なもののみと一致するということがすぐに明らかになった。別の芸術のミディアムから借用されているとおぼしき、または別の芸術のミディアムが借用しているとおぼしきどんな効果でも、各々の芸術の効果からことごとく除去することが自己–批判の仕事となった。それによって各々の芸術は「純粋」になり、その「純粋さ」の中に、その芸術の自立と保証と同様、その質の基準の保証が存在したであろう。「純粋さ」とは自己–限定のことを意味し、また芸術における自己–批判の企てとは徹底的な自己–限定のそれとなったのである。

クレメント・グリーンバーグ『グリーンバーグ批評選集』（藤枝晃雄編訳）、勁草書房、2005年、64頁、強調筆者。

芸術のモダニズム

① 媒体特殊性（絵画を絵画ならしめ、彫刻を彫刻ならしめる何か）

② 「徹底的な自己–限定」（グリーンバーグ）

芸術の自律（自立）性に対する態度

- 近代美術 → 肯定、擁護
  「かつての芸術においては、「作品から受け取られるべきものは、厳密に［その］内部に位置している」のに反して、リテラリズムの芸術の経験は、ある状況における客体の経験である――それは実質的には定義上、観者を含んでいるのである。」

  マイケル・フリード「芸術と客体性」（川田都樹子・藤枝晃雄訳）、浅田彰・岡崎乾二郎・松浦寿夫編『モダニズムのハード・コア――批評空間臨時増刊号』太田出版、1995年、71頁、強調原文。

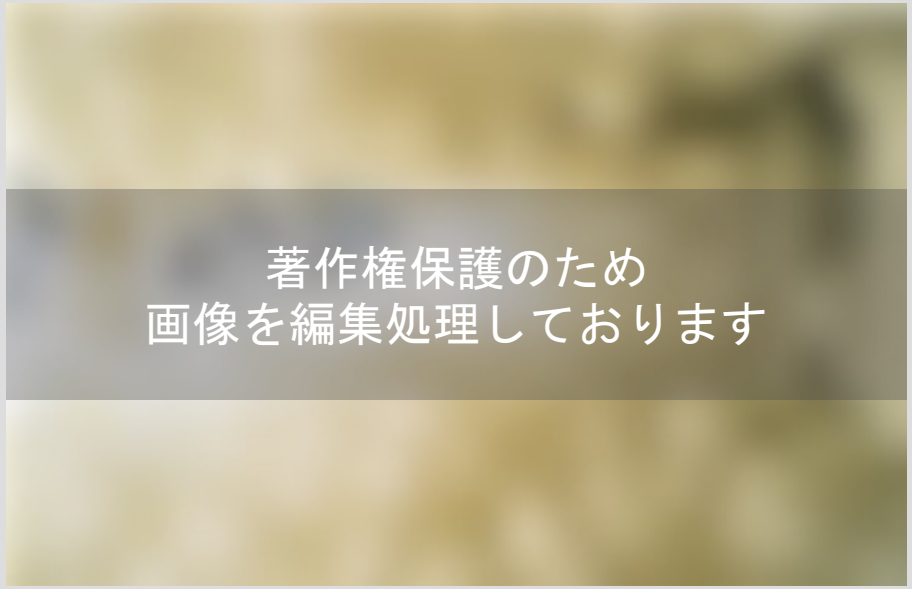
- 現代美術 → 否定、解体
  “One of the most decisive features of recent collaborative art practice is a rearticulation of aesthetic autonomy as art practice […]” (Grant H. Kester)
  （最近のコラボレーション型芸術実践の最も決定的な特徴のひとつは、芸術実践としての美的自律性の再考である）

  Grant H. Kester, *The One and the Many: Contemporary Collaborative Art in a Global Context* (Durham and London: Duke University Press, 2011), 14.

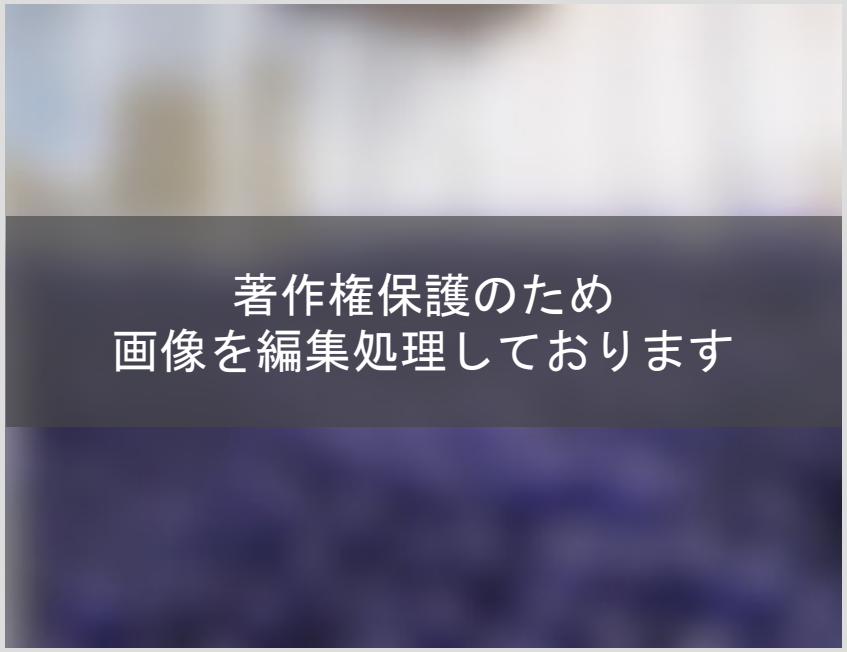
JUST STOP OIL
ジャスト・ストップ・オイル

Activists threw soup at a Van Gogh painting in London. They were protesting new oil and gas production.
Image Source: Just Stop Oil (CC BY-NC 4.0)
https://juststopoil.org/news-press/

MARTIN CREED
HALF THE AIR IN A GIVEN SPACE
(1998〜)

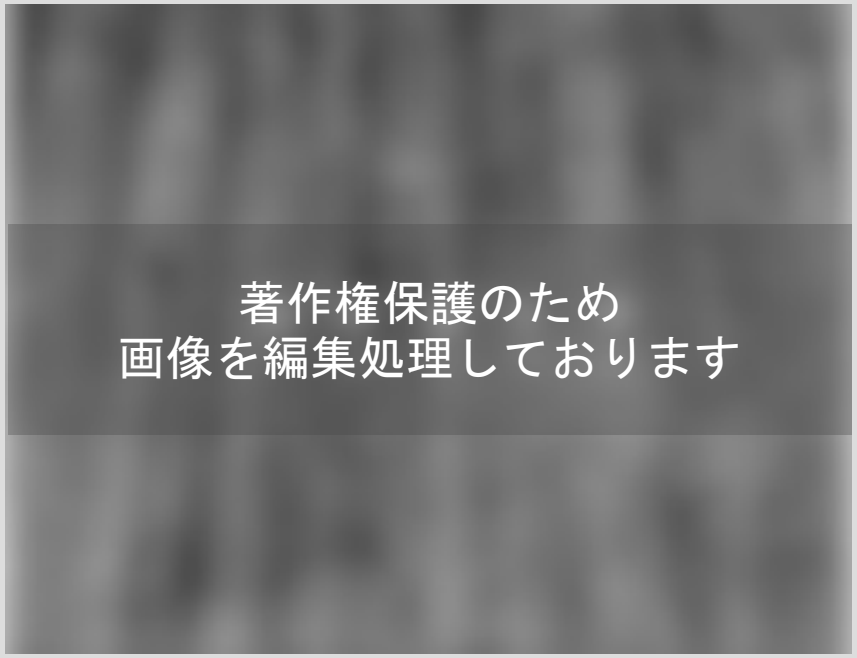


Martin Creed
Work NO.200: Half the air in a given space, 1998



Work No. 965: Half the air in a given space
2012, The Cleveland Museum of Art

MEL BOCHNER (B. 1940)
メル・ボックナー



《セオリー・オブ・スカルプチャー(五つの石／四つの間)》 1972年
国立国際美術館蔵

芸術における価値

- 「［芸術］批評の本性は、芸術作品の価値づけをすること――つまり、芸術作品のどこに価値があるのか、またどこに注意を払うべきなのかを発見すること、そして、なぜそうなのかを説明することである。」（キャロル、63頁。）
- 「（ある芸術作品が価値あるものであるならば）その芸術作品を価値あるものにしているものは、おおむね芸術家がその作品をつくるプロセスで達成したこと、である。よって批評の対象とは、芸術家の達成である。というのも、作品の価値の大部分はまさにそこにあるからだ。」（キャロル、76頁。）

ノエル・キャロル『批評について――芸術批評の哲学』（森功次訳）、勁草書房、2017年。

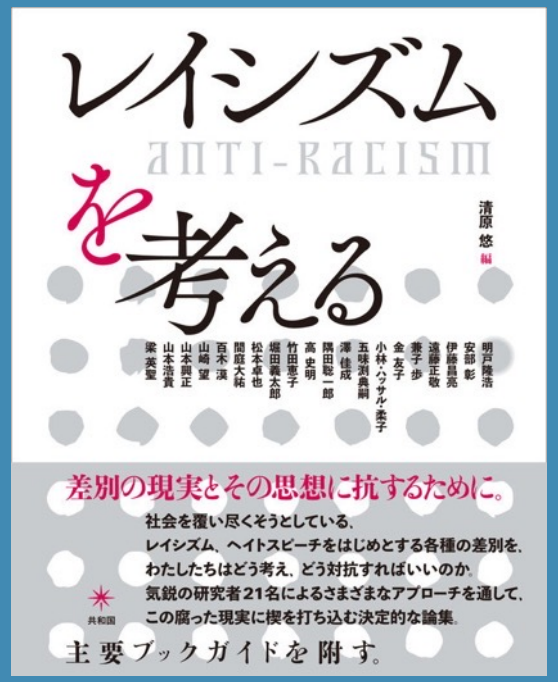
小泉明郎
《若き侍の肖像》
（2009）

https://www.mujin-to.com/artwork/若き侍の肖像/

小泉明郎
《夢の儀礼（帝国は今日も歌う）》
（2017）

写真：椎木静寧

清原悠編
『レイシズムを考える』
（共和国、2021）

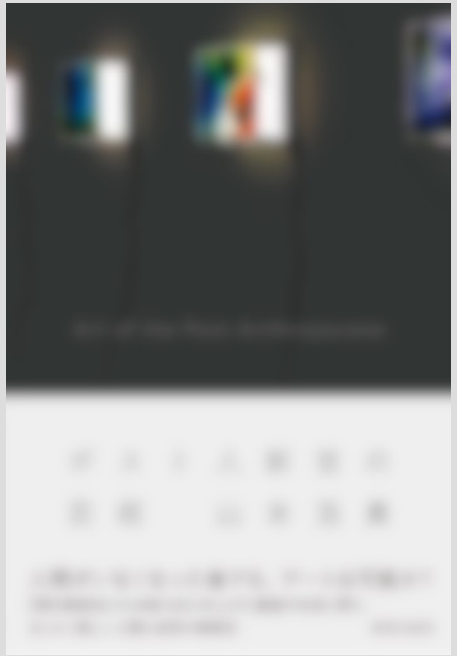


上村洋一
《HYPERTHERMIA——温熱療法》
（2019）

写真：木奥恵三

https://www.ntticc.or.jp/ja/archive/works/hyperthermia/

山本浩貴『ポスト人新世の芸術』
（美術出版社、 2022）
長谷川祐子編『新しいエコロジーとアート——「まごつき期」としての人新世』
（以文社、2022）



- 田辺明生「「人新世」時代の人間を問う——滅びゆく世界で生きるということ」東京大学東アジア藝文書院編『私たちはどのような世界を想像すべきか——東京大学 教養のフロンティア講義』トランスビュー、2021年
- 山本浩貴『現代美術史——欧米、日本、トランスナショナル』中央公論新社、2019年
- 北澤憲昭『眼の神殿——「美術」受容史ノート』筑摩書房、2020年
- ダントー、アーサー・C『アートとは何か——芸術の存在論と目的論』佐藤一進訳、人文書院、2018年
- グリーンバーグ、クレメント『グリーンバーグ批評選集』藤枝晃雄編訳、勁草書房、2005年
- フリード、マイケル「芸術と客体性」川田都樹子・藤枝晃雄訳、浅田彰・岡崎乾二郎・松浦寿夫編『モダニズムのハード・コア——批評空間臨時増刊号』太田出版、1995年
- Kester, Grant H. *The One and the Many: Contemporary Collaborative Art in a Global Context*. Durham and London: Duke University Press, 2011.
- ゴドフリー、トニー『コンセプチュアル・アート』木幡和枝訳、岩波書店、2001年
- キャロル、ノエル『批評について——芸術批評の哲学』森功次訳、勁草書房、2017年
- 高橋哲哉『犠牲のシステム——福島・沖縄』集英社、2012年
- 高史明『レイシズムを解剖する——在日コリアンへの偏見とインターネット』勁草書房、2015年
- 山本浩貴「トランスナショナル・ヒストリーとしての美術史に向けて」清原悠編『レイシズムを考える』共和国、2021年
- 柳沢英輔『フィールド・レコーディング入門——響きのなかで世界と出会う』フィルムアート社、2022年
- カーソン、レイチェル『沈黙の春』青樹築一訳、新潮社、1974年
- 山本浩貴「エコロジーの美術史」長谷川祐子編『新しいエコロジーとアート——「まごつき期」としての人新世』以文社、2022年
- 山本浩貴『ポスト人新世の芸術』美術出版社、2022年